〔書　評〕

成瀬隆純著

『唐代浄土教史の研究』

加藤弘孝

はじめに

本書『唐代浄土教史の研究』は長らく唐代初期の浄土教研究に従事してきた成瀬隆純氏の単著である。先行研究によって提唱された唐代浄土教の諸学説に対して再検討をおこなっている。その際、中国史学などの方法論を援用しながら考察を加える点が本書の大きな特色である。本評は各章で示された諸見解を論じると共に、それらを纏めて刊行し学界に問うことの学術的意義を併せて批評していくものである。

構成及び要旨

本書の目次は以下のごとくである。新稿の序文以外は昭和五十四年（一九七九）から平成二十七年（二〇一五）までの期間に発表された論稿に基づいている。

序
第一章　蒲州栖巖寺の浄土教
第二章　中国浄土教と自撲懺悔
第三章　弘法寺釈迦才考
第四章　道綽・善導之一家
第五章　道綽伝の齟齬と矛盾
第六章　道綽伝成立の背景
第七章　終南山悟真寺考
第八章　善導二人説の再検証
第九章　一巻本『般舟三昧経』の伝来
第十章　『観念法門』の虚像と実像

第十一章　中国浄土教における菩薩観
第十二章　別時念仏の起源と『観念法門』

第一章では、曇延系統の浄土教信仰の実態解明を課題とする。栖巌寺の開創が曇延によることを検証し、ついで『続高僧伝』（道宣撰）から栖巌寺に関係する僧の伝記を渉猟し、その幾人かに浄土信仰が見えることを指摘する。またそれらの伝記は往生伝的性格を有しており、迦才の手に成る往生伝（『浄土論』巻下、「往生人相貌章」）の先駆であるともする。そしてこれら蒲州の浄土教家においては、称名念仏をあくまで補助的な行法と見做していることから、玄中寺系統の浄土教とは系統が異なる栖巌寺系浄土教が存在していたことを指摘している。そして『浄土論』の作者である迦才はこの両系統から影響を受けていたという結論が示される。

第二章では、当時の王朝から異端と看做された「自撲懺悔」の用例を網羅した上で、「慧遠、道宣に代表される当時の仏教学者は、五体投地を五輪著地の礼法と解釈したのに対し、善導、懐感等の浄土教者は、五体投地あるいは挙身投地を解釈して、自撲法という特殊な懺悔法として理解していたことが分かったのである」（『本書』四七頁）と述べ、善導らの解釈が一般的な仏教界の通念からは逸脱していたとする。ついで『続高僧伝』などに見られる広州（広東省）、青州（山東省）における勅命による自撲懺悔の禁制を考察した上で、自撲懺悔が広州から青州を経由して江都（江蘇省）に至り、太原の道綽浄土教に受容されていったことを推測する。なお『観念法門』における自撲懺悔は一般民衆への教化を意識して付加された可能性が濃厚であるという。

第三章では、唐代初期に成立したと見られている『浄土論』の作者、迦才の出自に検討を加えている。まず『続高僧伝』に出る道撫という僧侶に着目し、迦才との共通項を指摘する。ついでその撰号が「逃名」（匿名）の可能性があると想定した上で、「釈迦才」という撰号に考察を加え、律家の匿名の撰号として用いられることの多い「釈氏」と同義の「釈迦子」の訛伝と結論付ける。これら両考察を重ねて、道撫と迦才が同一人物であると想定するのである。更には迦才を李好徳に連座した僧であるとする。

第四章では、「道綽・善導之一家」の浄土教系統を扱っている。碑文に見える道綽の事跡が従来、過大に評価されていることに異議を唱え、王都への浄土教布教の地ならしをおこない、道綽の浄土教を紹介したのは、道撫であるとする。その証左として山西地方の地域性を反映した浄土教の行儀が『浄土論』に見られるという事例を挙げている。更には『浄

土論』巻下の「往生人相貌章」に立伝される悟真寺の方啓は、『浄土論』の著者の可能性があるとした上で、道撫こと迦才と同一人物と想定し、道綽と善導の仲立ちを道撫（迦才）が務めた可能性を指摘する。

第五章では、玄中寺の碑文を取り上げ、金代に再建された経緯や史書に見える宗室の宗教観との齟齬などから本碑に見える太宗の行幸は虚構であると結論付ける。そして碑文再刻の時期に寺院が置かれていた情勢が反映されていると見るのである。すなわち当時の勢力を拡大していた玄中寺は、太宗皇帝とも因縁を持つ格式高い寺院であることを全国に喧伝する必要があったとするのである。この検証に基づき、『続高僧伝』の「道綽伝」は風聞などに基づいて撰述されたのではなく、道撫（迦才）の知見を情報源として記された可能性が高いと主張する。

第六章では、『続高僧伝』及び『浄土論』の両「道綽伝」撰述における撰者の情報源を検討している。具体的には『続高僧伝』と『浄土論』に立伝された「道綽伝」の共通点に言及し、これには前後関係がないことを指摘する。そして道宣の関心は禁欲的な信仰生活を実践する慧瓚教団にあり、浄土教に対してはさほど関心度が高くなかったことを述べる。ついで『続高僧伝』中の「伝者」の用例から『続高僧伝』「道綽伝」の情報源は道撫と結論付ける。これは同時に迦才と道撫が同一人格とする第三章の成果を傍証するものである。なお迦才『浄土論』の道綽入滅の記事は入京した善導によって齎された可能性があるという。

第七章では、終南山悟真寺と善導との関わりの真偽を考察する。まず岩井大慧説の検証をおこない、『続高僧伝』の諸伝を検討することで、悟真寺が浄土教との縁が薄い寺院であるとし、善導が入寺したとする伝承に疑問を投げかけている。また戒珠、王古が、悟真寺の位置を誤解していることを「僧衒伝」などの事例を挙げて検証し、善導の入寺説が宋代成立の『新修浄土往生伝』（王古撰）になって初めて出現した後世の伝承であることを強調している。なお『浄土論』に出る悟真寺の方啓に関して、註（一八）で道撫（迦才）との類似点を指摘し、同一人物の可能性を示唆する。

第八章では、『新修浄土往生伝』（王古撰）における岩井大慧氏の善導伝二分割説を検証している。まず『浄土往生伝』（戒珠撰）に見える善導捨身説は単独の情報源（『続高僧伝』）に基づく戒珠の独創であるとした上で、「道綽伝」の往生の記述もまた戒珠の独創とする。ついで『新修浄土往生伝』の「道綽伝」においては、戒珠が閲していない迦才『浄土論』を参照し、道綽の往生の様相を更新していることから、

善導伝を分割する動機が王古には見出せないとする。この観点を前提に『浄土往生伝』、『新修浄土往生伝』、『新編古今往生浄土宝珠集』（陸師寿撰）との比較対照をおこない、分割に関して楊傑の関与を導き出し、入寂年代が記される「善道伝」を立伝したのは楊傑だとする。最終的には岩井大慧氏と同様に善導二人説を否定しながらも、従来、考えられていたよりも更に複雑な過程を経て善導伝の二分割が成立しているとする。

第九章では、一巻本『般舟三昧経』の流通の過程を検討している。道綽、善導、迦才、懐感らが一巻本の影響を蒙っていることから、山西地方という限られた地域を中心に伝世していたことを指摘する。更に目録学を援用することで、一巻本は遼代（契丹期）に至り、その支配圏に入ったことによって、再評価され、それが高麗を経由して日本に流伝したとする。一巻本はその後も山西地方に流伝し続け、金代になって『金刻大蔵経』に入蔵したと結論付けている。なお本研究の成果によって一巻本の影響が色濃い『観念法門』の撰述地は山西地方である可能性が浮上してくるとも主張する。

第十章では、『観念法門』の善導著作における特殊な位置付けを確認している。迦才『浄土論』と『観念法門』を比較し、その共通する実践方法については、前者は道綽が実践していた念仏法を迦才が紹介した内容であると捉えるのが自然な解釈であるとした上で、『観念法門』の該当箇所もまた同様に道綽教団の行儀と見做せるとする。更に本書の題名に「経」という権威性が付与されていること、本書に『般舟三昧経』一巻本が引用されるという両事例を勘案して、これらが道綽の念仏法の地域的影響によるものと見做し、『観念法門』は善導の純粋な著作ではなく善導が道綽の行儀法を編集したものと見るのである。そして『往生礼讃』を長安に入って間もなくの成立であると結論付けた上で、両書の相違点は、善導自身の思想的変遷ではなく道綽浄土教（山西）から善導浄土教（長安）への思想的変容と見る。

第十一章では、曇鸞、道綽、善導ら浄土教家の菩薩観への考察をなし、当時の仏教界の通念を容認した曇鸞に対し、善導が菩薩と凡夫に明確な区分を設け、凡夫意識の高揚につとめたとする。その具体的な根拠としては『観念法門』において、一巻本『般舟三昧経』を用いる際に、「菩薩」という聖道門的要素を思い起させる語を、凡夫の意味を内包する語に置き換えている事例を挙げている。

第十二章では、『観念法門』に起原を持つ別時念仏の日本における受容過程を考察対象としている。種々の法然伝における「不断念仏」と「別時念仏」の用例を取り上げ、初期の

法然伝では、法然の別時行を「不断念仏」と表現していたのが、後代の『四十八巻伝』になると、「別時念仏」という表現に変遷していくことから、浄土宗教団がその発展と共に天台色を薄めていった背景を窺うことができるという。また『観念法門』は善導の純粋な著作ではなく道綽の行儀を編集した書物であるという見解も再提示している。

各章批評

いずれの章も先学の学説を再検討した上で、伝統的な教学にとらわれない独創的な見解が示されており、著者の広い視野を窺うことができる。とりわけ第三章「弘法寺釈迦才考」、第十章「『観念法門』の虚像と実像」などは氏の手法が冴え渡った箇所であろう。前者は迦才道撫同人説により玄中寺系浄土教の仏教界の位置付けを示している。後者は目録学、書誌学を援用して『観念法門』の地域性を解明している。注目すべきは、これらの論稿が関連研究として展開していくところである。初出論文の掲載順で確認すると、第三章が、一章、四章、五章、六章などの迦才関連研究に、第十章が、[1] 第二章、第九章、第十一章、第十二章などの『観念法門』の関連研究に展開していくのである。それぞれの研究を関連的に捉えた場合、どのような成果になるか確認してみたい。

まず迦才研究である。成果を列挙すると以下のごとくである。

・玄中寺系統の浄土教とは系統が異なる栖巌寺系浄土教が存在しており、『浄土論』の作者である迦才はこの両系統からの影響を蒙っていた（第一章）。

・迦才と道撫は同一人である（第三章）。

・道綽の浄土教を長安に紹介したのは、道撫（迦才）である。また『浄土論』に立伝される悟真寺の方啓は、『浄土論』の著者の可能性があり、これは道撫こと迦才と同一人物と想定され、これにより道綽と善導の仲立ちを道撫（迦才）が務めた可能性が浮上すると指摘する（第四章）。

・『続高僧伝』（道宣撰）の「道綽伝」は風聞などに基づいて撰述されたのではなく、道撫（迦才）の知見を情報源として記された可能性が高い（第五章）。

・『続高僧伝』中の「伝者」の用例から「道綽伝」執筆の情報源は道撫である。これは同時に迦才と道撫が同一人物だとする第三章の研究成果を傍証する。なお迦才『浄土論』の道綽入滅の記事は入京をした善導によって齎された可能性がある（第六章）。

また後述する七章においても、註（一八）で『浄土論』に出る悟真寺の方啓と道撫（迦才）との類似点を指摘し、同一

人物の可能性を示唆する。

玄中寺系統の浄土教と周辺の浄土教を繋ぐ迦才、長安仏教界に玄中寺系統の浄土教を紹介した迦才、道綽と善導の仲立ちをした迦才、氏の描き出す迦才像は、幅広い交友関係を持ち、様々な仏教思想を融通する柔軟な思考を有していた浄土教家である。

このような学僧が実在していたとするならば、道綽浄土教を基盤にしつつ、周辺の別系統の浄土教、中央仏教界の動向を意識し、善導による都市適応型浄土教の形成を促した浄土教家として位置付けられるであろう。

ただ第三章の『浄土論』の撰号に関しては、少なくとも律家の著作における「釈迦子」という撰述名の用例採取が蓋然性を保証するためには必要であろう。「子」と「才」の実際の誤字の事例も挙げる必要があったのではないか。蓋然性を高めるためにも迦才研究の今後の進展が待たれる。

次に『観念法門』研究である。結論を纏めると以下のようになる。

・『観念法門』において大衆教化を意識して自撰懺悔が原本に付加された（第二章）。

・一巻本『般舟三昧経』の影響が色濃い『観念法門』の撰述地は山西地方である（第九章）。

・民衆教化が強く意識された本書は善導の著作ではなく善導が道綽の行儀法を編集したものである。その際、三部経に準じた権威性が付与された（第十章）。

・『観念法門』編集の際には、「菩薩」の語の書替えや「自撰懺悔」などの語の付加が善導の主観によっておこなわれた（第十一章）。

・本書は日本に流伝していき、別時念仏に発展していった（第十二章）。

これら『観念法門』に関わる成果により玄中寺系浄土教が具える大衆性、地域性を浮き彫りにしたと言えるであろう。なお自撰懺悔を付加したのが何者であるのかに関しては、第二章の註（二三）で示唆されるのみで、明言されていないが、第十一章の註（二）で善導と記される。ただし玄中寺における道綽の行儀の実態と善導の付加要素を区別する基準は明確ではない。

また第七章「終南山悟真寺考」と第八章「善導二人説の再検証」はともに善導伝を扱っており関係が深いものであるので、併せて論ずる。善導の悟真寺入寺説が宋代成立の『新修浄土往生伝』（王古撰）の「善道伝」になって初めて出現した後世の伝承であることを強調する（第七章）。善導の捨身往生は戒珠『浄土往生伝』の独創であることと、王古に「善道伝」立伝の動機が薄いことを述べる（第八章）。悟真寺入寺説や二人説を検討しながら、善導伝の潤色要素を論じる。善導事跡研究及び後世の善導観研究に深く関わるものである。本研究は浄土教系教団において祖師として重んじられる善導の伝歴研究に影響を及ぼす可能性を有している。

両章に関わる要素としては、「善道伝」成立の問題が挙げられる。すなわち第七章で戒珠、王古には終南山悟真寺に対しての認識が不完全であることから、「善道伝」に見える悟真寺入寺は史実とは認めがたいとした上で、第八章において王古の朋友である楊傑こそが「善道伝」を分割立伝した上に、悟真寺入寺を付加した当人だと論じるのである。「善道伝」分割立伝の根拠としては『念仏鏡』序に記された「善道大師」への楊傑の尊崇態度と楊傑が江南を巡礼した際に、少康由来の善導没年を知り得たという想定に基づく。

ただなぜ楊傑が悟真寺入寺を善導伝に付加する必要があったかという動機の明示が不可欠であろう。第八章に「南山律の大家元照の助言を受けての楊傑の作文であったと思われる」（『本書』二〇一頁）とあるが、これについては元照の善導観などとの思想的整合性を検討していく必要があるように思われた。また岩井大慧氏以降の研究史[2]が示されない点も不満に感じたところである。

「善道伝」分割立伝の根拠の一つとされる『念仏鏡』序に関しては、『浄土十疑論』の序に基づき明代以降に偽作されたという主張が小笠原宣秀氏によってなされているが[3]、本書ではこれを検討しておらず、課題が残される。また楊傑が少康由来の善導の没年を確認できたとするのは（『本書』一九六頁七行～十七行）、想定に想定を重ねており根拠が弱いようにも思われた。

総評

以上、各章への評論をおこなった。最後に体系研究としての側面に着目しながら総評をおこないたい。各論の多くは仮説に留まるものであるが、それらの研究の蓄積に基づき演繹的に全体像を構築していると言える。とりわけ迦才の出自や『観念法門』に関する成果は相互に連関するものである（『本書』一〇四～一〇五頁、一二八～一二九頁）。

本研究による考証は、道綽・善導流とその周辺の浄土教、通仏教とを対比したものであり、従来考えられていたよりも複雑な唐代浄土教の情勢を浮き彫りにしている。すなわち玄中寺系浄土教とも言える道綽浄土教においては、山西仏教の地域性、大衆性、蒲州栖巌寺系統の浄土教との対決姿勢などが包含されており、これは王都長安において純化されていく

善導浄土教とは必ずしも同一線上で語れないことを示唆するのである。そして前者から後者への展開に際しては迦才が経由されていることをも指摘するのである。このような視点を明示した点において本書は評価されるべきであろう。

以上の本書の学術的価値を考慮するならば、本書の主題とも言えるこの特色（玄中寺系浄土教）を副題などで提示したほうがよかったのでないだろうか。また冒頭に以上のような問題提起を設定し、末尾で総括した上で、体系研究として提示されていれば、本書の学術的価値は更に高まったものと思われる。

おわりに

以上、論評をおこなった。本書で用いられた手法は書誌学、目録学などにまでわたっており、従来には無かった新視点を唐代浄土教研究に提供している。それらの成果は、迦才研究、『観念法門』研究、善導伝研究に分類することができる。特に迦才研究と『観念法門』研究は、道綽浄土教（山西）、善導浄土教（長安）の地域的特色を浮き彫りにすることに成功しており、唐代浄土教を立体的に明示しているのである。本書によって提出されたこの玄中寺系浄土教の実態という問題提起が学界に寄与するところは大きく、唐代浄土教史再構築に向けての一里塚となり得る可能性を秘めていると思われる。

(1) 「『観念法門』再考」（『印度学仏教学研究』第二八巻、第一号、日本印度学仏教学会、一九七九年）が第十章の原型である。

(2) 例えば藤田宏達『善導』（『人類の知的遺産』一八、講談社、一九八五年）など。

(3) 小笠原宣秀「求法西方浄土念仏鏡考」（『龍谷大学論集』第三五三号、龍谷学会、一九五六年）。

（A五判、三〇〇頁、六五〇〇円＋税、法藏館、二〇一八年五月刊）

（佛教大学非常勤講師　かとう　ひろたか）

万波寿子著

『近世仏書の文化史——西本願寺教団の出版メディア——』

小林准士

一　本書の構成

本書は、日本近世における出版書の中で大きな割合を占めていたにもかかわらず、これまで研究が手薄であった仏教書籍（以下、仏書とする）について、浄土真宗の本山である西本願寺が関わった事例を取り上げて、書誌学的あるいは社会史的な検討を加えた研究書である。全体の構成は左記の通りである。

（目次）

序章
第一節　これまでの書物研究
第二節　仏書研究の可能性
一　仏書研究の不在
二　仏書研究の可能性
三　研究方法
第三節　本書の構成
第一部　新しい仏書
はじめに
第一章　出版資本と仏教
第一節　室町時代までの概観
一　行為の重視
二　メディアとしての版本とその限界
第二節　近世期の仏教教団と出版制度
一　近世期仏教教団の書物需要
二　板株に基づく出版制度の成立

第三節　新しい仏書の出現
一　古活字版『浄土文類聚鈔』の分析
二　町版への積極的な転換
第二章　新しい仏書の展開
第一節　享受者の拡大
一　通俗化する仏書
二　共有される知識
第二節　『御文』の近世出版文化
一　「偽版のベストセラー」
二　学問書、勧化本
第三節　文学と唱導
一　和歌と唱導
二　南溟勧化本の和歌
おわりに
第二部　聖教の板株を巡って
はじめに
第一章　聖教叢書『真宗法要』開版
第一節　本山による聖教開版の機運
一　町版聖教への疑念
二　『真宗法要』開版計画
第二節　『真宗法要』開版までの経緯
一　開版までの交渉
二　解決へ
第三節　『真宗法要』開版の意義
一　板株への認識
二　本屋への影響
三　本山こそ聖教を
第二章　寺院間の聖教蔵版争い
第一節　末寺の蔵版阻止
一　『教行信証』蔵版の阻止
二　『御伝鈔』蔵版の阻止
第二節　新しい聖教叢書の刊行
一　三種の『真宗法彙』
二　『真宗法彙』の背景
第三章　縮刷版の流行
第一節　ゆらぐ本の格
一　参考書の御蔵版
二　天保十一年の達書
第二節　偽版から中本御蔵版へ
一　東本願寺御蔵版『真宗仮名聖教』
二　悟澄本の摘発

第三節　中本聖教の流行
一　中本『真宗法要』の開版計画
二　中本『六要鈔』の開版
第四節　近世から近代へ
一　銅版本
二　仏書の近代化
おわりに
第三部　出版制度と教団
はじめに
第一章　本山と本屋
第一節　本山と本屋仲間
一　影響の大きさ
二　教団内部への出版統制
第二節　御用書林の性質
一　寺内書林
二　永田調兵衛の活動
三　御用書林の性質
第二章　町版の多い勤行本
第一節　玄智校訂本『浄土三部経』の板株
一　経師の活動
二　玄智校訂本の元株
三　町版から御蔵版へ
第二節　本山と『正信偈和讃』町版
一　本山による弘通と町版
二　本山による町版の取得
第三章　公家鑑を巡る争い
第一節　掲載順序を巡って
一　公家鑑の掲載順序
二　東本願寺側の勝利
第二節　新しい公家鑑および地誌の刊行
一　公家鑑の新規開版
二　地誌、京絵図類への影響
おわりに
終章　文化史研究の可能性
第一節　総括
第二節　文化史としての仏書
一　仏書版本の発達と近世社会
二　課題と展望

二　本書の概要

右に示した構成から分かる通り、本書は三部に分かれてい

る。まず、第一部第一章では、中世寺院における印刷文化から近世初頭における商業出版の成立までの歴史的経緯が分かりやすく叙述されており、近世の出版文化に詳しくない読者でも基本的な知識を得つつ、本論を読み進めていけるよう、懇切な配慮がなされている。

また、古活字版の『浄土文類聚鈔』の諸本を詳細に検討し、開版者を教如とする説もある中で、准如開版であることを論証した分析の部分は、書誌学的な検討の有効性が遺憾なく発揮されており圧巻である。

さらに第二章では、本山である西本願寺から末寺に下付される免物（めんもつ）として扱われ、民間の書肆による出版は許されなかった『御文』（御文章）が取り上げられている。『御文』に無許可出版の偽版が多く現れ、近世中期にはその内容を分かりやすく解説した注釈書が刊行されると、近世後期には学僧による注釈書も執筆され出版されていくことを明らかにしている。

そして第二部では、西本願寺による聖教（浄土真宗の経典類）の蔵版化が主に取り扱われており、民間書肆による版株が成立していた仮名聖教を校訂し集成した『真宗法要』の出版が、版株を有した書肆に版木の一部を渡す留版という形態をとったこと、同寺の末寺である興正寺による『御伝鈔』などの聖教の出版を阻止するため、西本願寺がそれらを蔵版としたことなどが述べられている。このことと関連して、こうした本山による聖教の蔵版化に際して大きな役割を果たした玄智の行動についても明らかにされる一方、玄智編『真宗法彙』の版株が興正寺側に渡ったことで彼が本山から咎められるに至った経緯について触れられている。なお、この件をどのように解釈するかについては後ほど問題にしたい。

さて、第三章では本山の格を示すために『真宗法要』のように大本で出版されていた聖教が、近世後期になると、東本願寺が刊行した『真宗仮名聖教』や、西本願寺が刊行した『教行信証』のように、中本という小型の書型で出版されるようになった経緯について明らかにし、その背景に地方の私塾で学ぶようになった学僧たちの需要の存在があったこと、これに伴い書物の体裁によって本山の権威を示すという機能が失われていくことも指摘している。

最後に第三部では、浄土宗の本山である知恩院が版株を有していた『浄土三部経』を既述の玄智が校訂し、知恩院に板賃を支払うかたちで刊行した本が、西本願寺蔵版となった経緯や、経師と推定される鈴木肥後という人物が版株を所持していた『正信偈和讃』を、片仮名のルビ付きにして西本願寺が蔵版とし、免物として門末に下付するに至った経緯などが、

第二章で明らかにされている。また、第三章では、公家や寺院などの由緒を記した名鑑である公家鑑への東西両本願寺の掲載順序をめぐる争いが取り扱われ、一九世紀半ば頃には西本願寺が関係する書籍の版株を買い取り、『雲上明覧大全』という書名の公家鑑を独自に出版するにまで至ることなどが述べられている。

以上、ごく簡単に本書の概要を紹介した。本書の成果として評価できる点は左記の通りである。

①近世になると、真宗の僧侶や門徒が民間書肆によって出版されていた仏書を活用するようになり、本山の西本願寺もそうした状態を容認し、町版の仏書に依存した教団運営が行われていたことを明らかにしたこと。

②いっぽう『御文』など本山の蔵版とされ免物として下付された書籍もあり、また教学統制の観点から聖教の真偽判定を行い編纂された『真宗法要』が本山の蔵版となる場合もあったが、むしろ近世後期における聖教や公家鑑の蔵版化の背景には、独立志向を有した末寺の興正寺や、東本願寺などとの対立関係があった点を指摘したこと。

③近世後期には、聖教に宗教性を見出す意識が希薄となり、本来は免物であった『御文』の注釈書が普及したり、聖教にも縮刷版が増えたりするなど、本の格と本山の権威が相応した状態が崩れていくこと、そしてその背景には地方で学ぶ僧侶の増加や門徒による読書形態の変化などが想定されることを指摘したこと。

三　史料解読及び解釈上の問題

冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』（平楽寺書店、一九八三年）のように、日蓮宗に即してはこれまで研究があったものの、右に見てきたように、近世全体を視野に収めるかたちで西本願寺の蔵版書に検討を加えた研究は従来無く、近世仏書に関する研究を今後進めていく上で前提とすべき研究書に本書はなるであろう。

したがって、未開拓分野を切り開いた意欲的な研究書として評価できる本書であるが、一方で個々の事例に関する実証部分に関しては、いくつかの問題を指摘せざるを得ない。まず、残念ながら本文中に誤字・脱字が多く目立つ。例えば、「引野亮輔（亮→亨）」（10頁）、「仲間の官許ち合わせ（ち→と）」（41頁）、「当該本（に脱カ）ついては」（44頁）、「向学の宗主（向→好）」（45頁）、「正法五年（法→保）」（75頁）、「専修念仏の近世（近世→禁制）」（78頁）など、枚挙に暇がない。

以上は本文の叙述や他の著書からの引用部分に見られる誤字・脱字であるが、実証に関わるという点でより問題なのは、史料の解読や漢文の読み下しなどで誤りが目立つことである。こちらも枚挙に暇がないので、数例を指摘するだけに留めたい。

まず、第一部第二章八九頁から引用されている、龍谷大学大宮図書館蔵の『御文章之定』の本書における解読文を挙げる。

一　帰参申替、御判斗取替ハ、壱匁三歩（分）。表紙改候ヘハ、尤弐匁三歩（分）也。但、帰参之御文、取次衆幷役人衆見合（分）之上ニ而、可申上候事。

（略―評者による）

一　御文章御礼、上納相滞リ候衆江者、縦令誰（雖）為、（読点不要）一門互ニかしかり仕間敷、御判ハ不及申、摺おろしニ而茂かし申間敷、名代ニ出シ遣シ申事茂仕間敷事。

一　御末寺之御文章ハ、御判無之而茂不苦事。

一　御判無之御文章、他人ヘハ不及申、誰（雖）為親類一門中出シ申間敷事。

右の史料を、龍谷大学図書館の貴重資料画像データベースに掲載されている画像を閲覧して確認することにより、解読を修正した文字（傍に・を付した）を丸括弧内に示した。これにより、銀の貨幣単位の読み誤りや、「縦令誰為、一門」などとある箇所は「縦令雖為一門」と読むべき箇所であることが判明した。著者はこの箇所を「上納が滞った者に誰であっても金を貸し付けることを禁止している」などと訳しているが、修正した文章に基づけば、「たとえ（御文章の下付を願い、上納金を滞らせている者が）一門の者であっても、互いにを貸し借りしてはならない」という訳になるであろう。

次に掲げるのは、第二部第三章二二八頁に引用されている、龍谷大学大宮図書館蔵の『悟澄開版本典ニ付大坂出張記録』の一部である。

其後追々承り伝へ所、持主（望）之者多ク有之ニ付、右快隣江板本売弘所相尋候処、快隣申候者、右者一両輩同志之者申合セ取拵候品ニ而則板本売弘所者

大坂伝坂（備後）町西横堀西江入長堀（浜）町

播磨屋五郎兵衛

方ニ有之趣（、乍）然右者書林ニ而者無之、書籍表紙仕立を業ニ致居候者ニ而、此儀者甚可秘事ニ候、表向ニ相成候而者六ヶ敷子細有之由申之居候、依而相求度存候者有之候共、（右）五郎兵衛方江表向者不及申、内々申込相頼候共、快隣并同志之者より手紙無之而者売渡不申由、

右本庄寺申候（口）ニ依而相考候処、先者快隣不埒之刊（巧）ニ令同定（意）候而取拵候者与者不相趣（見）、（乍）然不正之品与不心附貰受候との趣（儀）、虚実不文（分）明ニ候へ共、暫ク話（活）手段を以て、御殿御為筋を篤ク申聞、快隣を致同道可致上京様申致（渡）、別紙之通御請書為相認、旧冬十二月廿三日、一先□□（帰国）申付、当春正月中ニ者致上京候手積りニ相成有之候、

前と同じく龍谷大学の貴重資料画像データベースによって、訂正したり補ったりした部分が丸括弧内の内容である。右の史料により著者は、天保年間に安芸の悟澄が密かに出版した中本の『教行信証』を所有する者が多くなっていたと指摘しているが、実際には所望する者が多くなっていることが触れられているだけである。また、著者は「西本願寺は手紙を用意させ、快隣を伴い大坂に向かい、入手を試みている」と述べているが、右の史料は大坂の津村御坊で同書を所持していた讃岐国の本正寺から聞き取った内容であり、本正寺を大坂から讃岐に帰国させ、本正寺に本を譲り渡した快隣を伴って上京させる手はずになっていたことが書かれている部分である。したがって、著者が述べるような事態は生じていない。しかもその後の記載を見ると、快隣の上京を待たず、西本願寺は大坂東町奉行に出訴している。

さらに著者は同史料を引用し、「彼方江刻（引）上ケ候様」（本書二三三頁）との文言を根拠にして、東本願寺が先に中本の『教行信証』を出版することを西本願寺が危惧していたとするが、同様の方法により確認すると、「刻」は「引」と読め、また同史料には「右教行信証別株有之候故、万一彼方ニ而証跡相知先訴ニ相成候而者甚心外」と書かれているように、先に出版されることが問題となっているのではなく、悟澄本が東本願寺に渡り町奉行所へ先に訴えられることが問題になっていたことが分かる。

なお、著者は本章（第二部第三章）で佐々木求巳『眞宗典籍刊行史稿』（傳久寺、一九七三年）に従い、右の悟澄本の一件があった直後の天保九年（一八三八）七月に西本願寺が中本の『教行信証』を出版したとするが、「小本本典開版記録」（龍谷大学大宮図書館 022-116-1）や、著者が二八七頁に引用する「小本六要鈔開版記録」（同前 022-115-1）に掲載されている永田調兵衛の歎願書（本書引用部分よりも前の箇所）によれば、弘化二年（一八四五）頃に永田調兵衛らによって調進され西本願寺の蔵版となったことが明らかである。したがって、「安芸本の摘発直後に、慌ただしく中本『教行信証』を再刊したのだった」とする著者の指摘は成り立たな

いと思われる。

そして最後に掲げるのは、第三部第二章三二三頁に引用されている、龍谷大学大宮図書館蔵の『興復記一件』の一部である。

一　御蔵板三部経大本、慶証寺清濁付

右者、出来之節花頂山江留板差出、本一部ニ付九匁（分）ツヽ納申候、今ニ御摺立之節者、相納メ申候事。

右三部経、元来慶証寺（清濁ニ而町板ニ御座候処、文化八年未二月）御蔵板ニ相成申候事。

右之通相心得居申候。若又相違之義（儀）等御座候ハヽ、御他余（記録）御調之上、被仰付可（被）下候。

嘉永六年　　永田調兵衛（印）

丑正月　　丁子屋庄兵衛（印）

御蔵板懸り

藤田大学様

前掲の二点と同様の方法で補正した丸括弧内の内容を見ると分かるように、かなり長い脱文のあること、慶証寺玄智が知恩院蔵版の『浄土三部経』をもとに新たな版を出した際に、知恩院に支払った板賃が本一部につき九匁ではなく九分であることが判明する。金額に十倍もの違いがあり、細かい点かもしれないが、新たな版を製作しようとする者が元株の持ち主に払う負担額の理解がかなり違ってきてしまう。

同様の貨幣単位の誤りは同じ章の三三二頁に引用される史料にも見られる。龍谷大学大宮図書館蔵の『仮名正信偈一件記録』は同図書館の貴重資料画像データベースで公開されていないため原文を確認できないが、「壱分二歩」と解読されている箇所は、印刷された『仮名正信偈』の部数「弐万五千五百五十部」とその価格「銀三拾貫目六百六拾分」という数値を前提とすると、30,660÷25,550＝1.2となり、壱匁二分でなければ辻褄が合わない。

このように、本書には史料の解読ミスがかなりの数見られ、これに伴い、事実関係の理解の誤りも生じている。したがって、著者には改めて史料解読の再確認と実証内容の再検討を求めたい。また、一部史料については龍谷大学図書館の貴重資料画像データベースで確認できるので、本書の叙述に依拠しようとする読者にはそちらを参照することもお勧めする。

四　本書の論点をめぐって

次に本書が提示している論点に即して、いくつか検討を加えてみたい。

一般的に言って、「仏書の文化史」を叙述しようとする場合、仏教諸宗派の本山、本屋（書肆）、著作者、読者などに

着目して検討を加える必要があると思われる。本書の特徴は、これらのうち書籍の蔵版者としての本山寺院や本屋に注目する部分が多く、これに比して著者や読者については触れるところが少ないという点にある。尤も、読者については、『御文』の偽版やその注釈書が出版される背景として、門徒の需要や分析的な読書の普及といった事態があったことや（第一部第二章一〇一頁）、聖教の縮刷版が刊行される背景に僧侶による教学研鑽が地方の私塾でなされるようになったことなどが指摘されており（第二部第三章二四七頁）、いちおうの論及がある。しかし、本書ではおもに中世までに書かれた聖教に焦点を合わせたこともあって、近世の僧侶による著作と出版活動については、説教僧であった南溟の勧化本（第一部第二章）や、玄智の『真宗法彙』に関する考察などに叙述が限られている。

また、教団に属する僧侶による出版活動への統制については第三部第一章で触れられてはいるものの、具体的な事例を取り上げての検討には及んでいない。この点は今後の課題となろうが、但し「西本願寺教団の出版メディア」という本書の副題に即して言えば、本書で取り扱われた狭義の意味での本山だけでなく、僧侶の修学機関である学林による出版活動にも、もう少し目を配る必要があったように思われる。

というのも、本書ではあまり意識されていないが、学林は本山の附属施設ではあるけれども、本山の宗務執行機関とはいちおう区別しておく必要があるからである。そしてこの区別は、本書で取り扱われている、寛政初年における玄智の処遇の問題を考えるにあたっては、とりわけ重要に思われる。本書で明らかにされているように、玄智は自ら編纂した『大谷本願寺通紀』の「宗主伝」の流布停止という処分を受けると同時に、また『真宗法彙』の版権を興正寺の大麟に譲り渡したことでも本山に咎められるが（第二部第二章）、そもそも当時の学林の能化が唱えた学説である三業帰命説を真っ向から批判している大麟と交友関係があったこと自体、玄智が学林とは距離をとっていたことが示すものであろう。しかし、当時、学林が能化の説く三業帰命説を「御本山御正化」として位置づけた上で、興正寺宗主法高が三業帰命説を批判した書である『安心決正之消息』を問題視していたことは、本書で述べられている通りである（第二部第二章一九五頁）。

そうした状況にもかかわらず、玄智は『大谷本願寺通紀』において、例えば、寛政元年（一七八九）六月に法如と文如が出した「御形見御書」に触れて、この文中にある「一心向弥陀如来之言」の解釈が「三業帰命徒」とこれを批判する者との間で分かれて決着が付いていない旨を叙述している

（『真宗史料集成』第八巻、同朋舎、一九七四年、四一五頁）。そしてこの箇所に限らず、『大谷本願寺通紀』では三業帰命説を「御本山御正化」と位置づけているとは考えられない叙述が散見される。天明年間以降、西本願寺と興正寺の関係が悪化し、争点の一つに三業帰命説の是非が浮上する中、『大谷本願寺通紀』の叙述内容は、学林を含む西本願寺内の対立を客観的に描写することで、却って玄智自身もその対立に巻き込まれる性質のものであったと考えられる。

また、玄智は本山において法会の執行や法談などを担当する堂達（御堂衆）の一人でもあったが、『大谷本願寺通紀』では堂達と学林とが対立した事例も叙述の対象とした。例えば、天明五年（一七八五）の報恩講で覚王寺周民が行った初夜説法について学林所化が議論に及んだことを述べた後、宝暦年間以来の類例に触れつつ、「堂衆」が命を受けて宗主の代官として行う説法に対し、「末弟」が批判を加えることに否定的な意見を敢えて紹介している（同前、四〇九頁）。

このように、一口に本山と言っても、坊官、堂達、学林の僧侶たちが一枚岩であったわけではない。河南四郎兵衛が「御本山御学林書林」を肩書きとし（第三部第一章二八五頁）、学林が独自に版株を持つ書もあったこと（第三部第三章三五三頁）を考慮に入れるならば、「西本願寺教団の出版メディア」内部の多元的構造について、今後注目していくことが求められよう。

ところで、本書においては三業帰命説の是非をめぐる教団内の騒動である三業惑乱について、「本山たる西本願寺と在野が対立」という構図で捉えているが、実際には真宗が比較的優勢な各地域で同説をめぐって対立が起こり、それらの対立が連動して終に学林、本山にまで及んだのが三業惑乱であったと私は考えている。こうした考え方の当否はさておき、このような騒動の構図は、本書第三部第三章で取り扱われている公家鑑における東西両本願寺の掲載順序及びその出版をめぐる、両寺の争いにも見られるので、付言しておきたい。

本書では文政七年五月の門末からの要望書を引いて、「自らが帰属する教団が優位であることを望む門末の強い要望に由来」して東西両本願寺の争いが起こっていると理解している（三七〇頁）。確かにその通りなのであるが、所引史料が掲載されている『本願寺史料集成　豊後国諸記　上』（同朋舎、一九九四年）の前後の記事を見ると、東西の本願寺あるいは仏光寺などを本山とする真宗寺院の改派（宗派の変更）が多く問題になっていたことが分かる。おそらくこのことが「門末の強い要望」の背景にあると考えられよう。

聖教の蔵版化や公家鑑の掲載順序をめぐる争いに見られる、

本山権威の競合関係を明らかにしたことは本書の大きな成果である。今後はその歴史的背景を地域における僧侶・門徒間の対立・競合関係に探っていく必要がある。しかも、そのことは書籍に対する需要や、読書の有り様、書籍の流通形態と無関係でないはずで、「仏書の文化史」の研究対象であると考えられる。

さて、最後に仏書を取り扱った本屋について触れておきたい。本書では、例えば西本願寺の御用書林（御蔵板支配）を務めた永田調兵衛に即して「西本願寺にとって町版を生み出す本屋は御用書林と言えど外的存在であった」（第三部第一章三〇三頁）とし、本山の統制は民間の書肆には及ばなかったとしている。たしかに、京都の書林仲間に属してその法に従う民間の書肆であった永田調兵衛に、僧侶身分の集団としての教団の法、すなわち寺法が適用されなかったことは当然である。

しかし、本書に引用されている、安政三年（一八五六）一一月に御境内書林講惣代の菱屋調兵衛（永田調兵衛を指す）・丁子屋庄助が出した願書によると、「書林之儀は御境内御作法も有之、構（講）内之外猥ニ渡世相始候ては、御本山御差支之書物類売捌候哉も難斗奉存候ニ付、向後私共構（講）内他猥ニ書林店差出し不申様仕度」などとある（第三部第一章二九〇頁、なお典拠に基づき丸括弧内に修正した文字を示した）。これによれば、寺内町に限った話しではあるが、永田調兵衛を含む寺内町の本屋たちは、本山の統制に沿うかたちで本の販売について自主規制を試みていたことがうかがえる。つまり、本来は俗人に適用されないはずの教団の法は、「御境内御作法」を介して民間書肆の行動に間接的な影響を及ぼす可能性があった点には一応の注意が必要であろう。

以上、本書が提示した論点に即していくつかの指摘を試みてきたが、網羅的な検討はできなかった。本書に史料の解読ミス等が多く見られるのは残念であるが、研究が手薄な分野に参入し多くのことを明らかにした本書の成果が貴重であることは揺るぎない事実である。著者による「仏書の文化史」の試みが今後も発展することを願い、筆を擱くことにしたい。

（法藏館、二〇一八年二月、A5判、四四三頁、七五〇〇円＋税）

（島根大学教授　こばやし　じゅんじ）

〔新刊紹介〕

青木馨著

『本願寺教団展開の基礎的研究――戦国期から近世へ――』

木越祐馨

一

本書は、長年にわたって真宗・本願寺関係史料の調査活動を継続してきた著者が発表してきた、戦国から江戸時代に及ぶ論考によって構成されている。まず大きく三編からなる内容を示しておこう。括弧内の年次は初出年である。

序　論――研究史と課題（新稿）

第Ⅰ編　三河における地域道場から教団への展開

第一章　三河の初期真宗概観（新稿）

第二章　文明十六年『如光弟子帳』（一九八〇年）

第三章　本宗寺の成立と展開（一九八七年）

第四章　本願寺教団の形成（一九九八年）

補　論　「御文」本流布の実態（一九九〇年）

第Ⅱ編　本願寺門主制と近世の末寺身分

第一章　本願寺門主制の性格（一九九九年）

第二章　戦国期門主とその一族―装束に見る―（一九九八年）

第三章　近世「似影」に見る住職家の成立と格付（二〇一七年・新稿）

補　論　願力寺所蔵史料『余間昇進記録』（新稿）

第Ⅲ編　本願寺下付物と墨書名号

第一章　戦国期本尊・影像論（一九九七年）

第二章　墨書名号の考察（一九九八年・二〇〇八年・二〇〇〇年）

補　論　墨書幼児名号について（二〇〇四年）

総　論　由緒・伝承の成立（二〇〇七年）

結　語（新稿）

著者は長年、本願寺よりの授与物である本尊・影像類とその裏書を蒐集・採訪しており、分析・検討の成果が各論考の基礎となっている。その視点は著者が居住する三河国から本願寺へと及んでいることが論考の初出年からうかがえる。さらにこれまで研究の対象とされなかった似影、史料化を困難にしていた名号について考察を進めたことが注目されよう。本稿で紹介する内容は、筆者の関心のままに取捨したものであることをご寛恕いただきたい。

二

第Ⅰ編は、三河における初期真宗から一向一揆までの期間の教団体制の形成を検討する。

第一章では、三河真宗の原点とされる貞治三年（一三六四）の識語を有する『三河念仏相承日記』の問題点を指摘したうえで、「安城御影」を奉持した専海の存在に注目する。遠江に居住した専海、その後継の三河移住を重視している。

第二章では、上宮寺末道場の所在地・道場主名を記載する文明十六年（一四八四）『如光弟子帳』を分析する。所在地をa地域（矢作川下流域の西三河平野部）・b地域（西三河山間部・矢作川上流域）・C地域（木曽川流域の尾張北西部から美濃南東部の平野部）に分類して特徴を述べる。ついで調査等で得た各道場に授与された絵像本尊の裏書を示し、『如光弟子帳』成立時の基礎的本末関係の成立を確認している。また「末」「手次」の記述に触れ、特に「手次」は礼銭をともなう法義を介した関係と推定する。

第三章では、享禄五年（一五三二）を寺号の初見とする一家衆寺院本宗寺の成立の背景を検討する。同寺は如光と関係するとされる土呂坊を前身とし、別坊の鷲塚坊との二坊で構成され、本願寺実如の四男実円の入寺により、三河三カ寺以下の与力体制が整う。次に同寺取立にあたって、上宮寺門徒の吸収を示唆する。松阪市本宗寺と上宮寺所蔵の蓮如・如光連座像（上宮寺本亡佚）・「皆乗院実孝書」（本善寺所蔵）等によって、上宮寺系が領導していた大和吉野門徒が、実如の命により本宗寺・本善寺に付属したことを指摘する。さらに鷲塚でも上宮寺の影響力を推定している。以上の過程を「実如化」の体制と結論付ける。

第四章では、上宮寺以外の本證寺・勝鬘寺および浄妙寺・両無量寿寺等の大坊主を取り上げ、門徒道場の形成状況を本尊・影像類の裏書からみていき、所在地の分布の様子、本願

寺との関係に言及する。さらに専海を祖とする願照寺の存在に注目する。碧南市願随寺所蔵の蓮淳書状に登場する「願照寺」を、従来の蓮淳関係の願証寺の誤記とする説を否定、かつて「安城御影」を伝来した願照寺に比定した。蓮淳は願照寺が法義に厚い存在として、宛所の本證寺・勝鬘寺に談合すべきことを指示している。これも「実如化」の一環であり、大坊主を掣肘する様子が窺えよう。

三

第Ⅱ編は、戦国期から近世に及ぶ本願寺門主の権能・制度を、近世の家元制度の先駆的制度と説く研究をうけて検討する。検討のための史料として、門主及び一族の影像、一族と末寺住持の似影を用いる。そこに描かれた装束、装束の根拠となる身分について論を進めていく。

第一章では、門主の権能を下付・授与権（礼拝物・聖教・法）、儀式主催権、相伝権の三点に集約する。下付・授与権で「御文」については製作者蓮如の名ではなく、代々門主名で開板する点に注目、開山の名代たる門主が門末に下付するととらえている（同じく第Ⅰ編補論でも触れている）。この指摘は同権能を支える論理となろう。儀式主宰権では、報恩講を法要儀式・改悔批判・斎に絞って概観する。相伝権については蓮如近親の家柄の「相伝家」に伝承された『相伝義書』を対象に論述し、この点に近世家元制との共通性を見出そうとしている。

第二章では、天正七年（一五七九）に顕如が授与した蓮如八男教行寺蓮芸の息実誓（一五〇六～六三）影像に描かれた装束の分析から、門主および一族の身分体系に迫っている。実誓影像は上畳に左向きで座し、茶系で鶴丸紋の入った僧綱襟の紋衣に、白色で同紋入りの袈裟を着し、右手に檜扇、左手に念珠を一重に握る姿である。本影像と他の影像から、東西分派期までの変化を導き出した。この間に顕如の門跡成によって権威化をみせる点にも言及する。いっぽうで親鸞影像の装束を変化させなかったことに注目している。

第三章では、これまで史料として活用されることのなかった、近世の末寺住持の画像である似影から、身分体系を読み取ろうとするものである。まず法衣の変遷を概観し、十八世紀に入り、門主とその一族が裘帯着用に限られることに対して、末寺住持は白鈍色・五条袈裟に統一される。この似影許可は身分格の余間昇進と五条袈裟着用許可と連動すると推定する。また五条袈裟の紋にも着目している。ここでも家元制と比較して、その機能と体系が本願寺教団において具現されたと主張している。その広がりが地方末寺に及んだことも指

摘する。

補論では、余間昇進をめぐる史料を掲げる。その実態が示されるほか、昇進願の根拠とする由緒書が史実と乖離することを指摘する。

四

第Ⅲ編は、本願寺教団の造形資料である本尊・影像・名号について、像容・裏書等から機能を読み解く試みを行っている。第一章では、真宗寺院を「掛け軸教団」と端的に指摘し、蓮如による礼拝物の統一、および裏書の様式の確立を確認する。裏書の機能について、別紙貼付のほかに裱背に直書する事例を見出し、下文・下知状的意味を持つとの説よりも、願主と来世を結ぶ善根明記の書との説に親近感を覚えている。ついで名号本尊・絵像本尊の特徴を記述し、開山親鸞像・蓮如寿像に言及する。なかでも開山親鸞像について、礼盤に縹繝縁の畳に座す単身像を、安城御影を模して創出した蓮如の意図を追求している。礼盤に縹繝縁の畳に黒衣を着する本来あり得ない姿は、小紋高麗縁の上畳に座す本願寺歴代と決定的差異を示しながら、開山像として権威化をはかるための視覚的表現ととらえている。同じく蓮如寿像とは「生ける蓮如」を親鸞像と同様に礼拝対象として教団糾合の視覚的装置と評した。

第二章では、これまで草書体六字名号の筆跡が、これまで名号のもつ由緒や伝承、または研究者の主観によって判断されていたものを、客観性を重視するために、根拠となる筆跡を特定して、ＡＢＣのタイプに分類した。Ａタイプは蓮如筆、Ｂタイプは実如筆と推定し、Ａ・Ｂタイプと異なる筆法を用いた系統をＣタイプにまとめ、さらに五分類した。Ｃ―１は実如筆の可能性、Ｃ―２・Ｃ―３は蓮如筆、Ｃ―４は実如筆、Ｃ―５は順如筆と推定する。また綽如筆と伝える名号についても言及する。ついで蓮如筆墨書名号の意義を検討するため、種々の名号を概観したうえで、たびたび「御文」で表現される六字釈が六字名号授与と呼応し、「南无阿弥陀仏」の口称と安置される六字名号が一致することを指摘する。墨書名号は礼拝対象としての本尊的機能より信心獲得の用を強調する。なお裏書をともなわず、奉懸場所の移動する名号を史料としてとらえる試みとして、飛騨・三河・加賀（能美郡）で、タイプ別に集成した。特に三河では蓮如筆が圧倒し、実如期に急速な絵像本尊化の進行を指摘する。このほか幼児名号にも興味を示し、教如の法嗣であった観如の筆とされる名号や本願寺歴代銘等を検討、十五歳で没した後の法嗣問題の影響を提起する。

総論では、御旧跡成立・聖地創出について、法宝物を根拠にして増幅される過程を、三河の土呂・鷲塚等を事例として言及する。また第Ⅱ編補論で取り上げた願力寺における由緒創成を改めて官位昇進運動と関説する。官位昇進を住持・門徒の名誉とする点に、本願寺を結集軸とするところに、近世の特質をみている。

本書は長年にわたって、名号・本尊・影像等を一途に採訪してきた著者の成果である。なかでも名号の筆者について、研究者の主観から史料に基づく客観を追求した意義は大きい。著者が中心となってまとめた『蓮如名号の研究』（同朋大学仏教文化研究所研究叢書Ⅰ、法藏館、一九九八年）の参照をおすすめする。またこれまで史料として扱われることのなかった似影についても検討し、近世本願寺の身分制を視覚化したものと評価した。教義・制度が名号等に表現されていることを改めて示唆する内容である。今後とも著者には新たな〝史料〟の発見・評価に期待したい。

（法藏館、二〇一八年三月、A5判、四六四頁、九八〇〇円＋税）

（加能地域史研究会代表委員　きごし　ゆうけい）

赤松徹眞編著

『反省会雑誌』とその周辺

武井謙悟

龍谷大学は、戦前から仏教雑誌への関心が高く、昭和六年（一九三一）の『仏教学関係雑誌論文分類目録』をはじめとする多くの成果を生み出してきた。「シリーズ近代日本の仏教ジャーナリズム」の第一巻として上梓された本書も、これまでの研究を継承し発展させる意義を持つものである。本書は、主に明治二〇年代に刊行された雑誌に焦点をあて、五名の執筆者による解説論文と各誌総目次の二部で構成されている。本紹介文では、目次を示した上で各論文の要約を行い、若干のコメントを附したい。

はじめに　赤松徹眞
第一部　解説論文
第一章　『反省会雑誌』とその周辺　藤原正信
第二章　真宗青年伝道会の設立と機関誌『伝道会雑誌』について　赤松徹眞
第三章　『海外仏教事情』と仏教ネットワークの時代　吉永進一
第四章　令知会の組織と雑誌　近藤俊太郎
第五章　『國教』にみる通仏教的結束とその挫折　中西直樹
第二部　各誌総目次　中西直樹
雑誌『反省会雑誌』総目次
雑誌『伝道会雑誌』総目次
雑誌『海外仏教事情』総目次
雑誌『令知会雑誌』総目次
雑誌『國教』総目次

雑誌『九州仏教軍』総目次
号・異名等一覧
あとがき　中西直樹

藤原論文は、本書の中心であり、「禁酒進徳」を標榜する反省会の機関誌として明治二〇年（一八八七）に刊行された『反省会雑誌』を分析している。本雑誌は、現在も刊行中の『中央公論』の前身であり、マイクロフィルム版、翻刻、総目録および関連する先行研究も存在する。本論文の特徴は、『反省会雑誌』通号五〇号分に対象を絞ることにより、精緻な検証を行った点にある。まず、内地雑居によるキリスト教拡大に対する危機感などから普通教校の学生らによって反省会が結成された経緯を紹介し、『反省会雑誌』の構成、体裁、発行部数および会員数の推移を提示している。次に「新加入会員数」の項目から役員一覧表を作成し、後に経緯会を設立する古川勇の動向と、『経世博議』の主筆であった中西牛郎の介入に着目した。文学寮を離れ、『反省会雑誌』に投稿を続けた古川と、文学寮で「一大国家」のための構想を描いた中西、両者とも本山からの文学寮独立を図ったことが指摘されている。最後に藤原氏は、明治二一年の普通教校廃止による校外への反省会本部移転、明治二五年『反省雑誌』と改題し発行元を「反省雑誌社」へ変更、文学寮改正に伴う中西牛郎の罷免、さらに明治二九年には東京市に移転、二年後に『中央公論』と誌名変更し「反省社」発行となり総合雑誌の性格を強めていく、といった本山の圧迫による変遷を述べ、後続継誌も含めた分析の可能性を示唆している。

赤松論文は、国内外の政情変化や、キリスト教関係の学校開校という状況下で、本願寺の大教校から大学林に至る改革を瞥見し、青年学徒達がどのような目的・課題意識をもって真宗青年伝道会を設立し、何を目的として『伝道会雑誌』を発刊したかを論じた。さらに、同誌の論説から、青年学徒達の仏教理解を分析し、彼らの宗教的立場と歴史的性格を示している。『反省会雑誌』が当初から雑誌の発行を計画して、教団の外をも視野に入れていたのに対して、『伝道会雑誌』は、主として教団内を対象とする論説・講義・雑報・雑録からなり、本願寺の議会＝集会への批判や、大学林の学風を論じたことが特徴であった。赤松氏は、多様な論説のなかから、第一号や発刊三年後の教育勅語に関する論説を取り上げ、真宗青年伝道会は、真俗二諦の教学理解を継承し、新たな時代状況に積極的に対応する道徳としての仏教を見出し、そのための仏教改良とその担い手としての真宗青年という役割を位置づけた、と指摘した。しかし、明治二三年に教育勅語が発

表されると、「俗諦」「処世」に関わるものとして「道徳」の重要性を示し、教育勅語での儒教的道徳への対応を主張する。それゆえ真宗青年会の仏教改良論は、実践性があっても、仏教の普遍性への思索回路を欠如した宗教的立場であり、帝国日本に順応する仏教の改良、道徳論という歴史的性格を持っていたことを明らかにしている。

吉永論文は、海外宣教会の誕生経緯、国内外の状況、雑誌『海外仏教事情』の特徴と組織の歴史をまとめている。普通教校教員松山松太郎とアーリア神智学協会会長ジャッジとの一対一の書簡はアメリカで宣伝され、松山のもとに海外からの問い合わせが殺到した。それらに答えるため、明治二〇年に「欧米通信会」が結成され、翌年七月日本最初の英字新聞 *Bijou of Asia* が発行された。同年八月には欧米通信会を発展させ「海外宣教会」が誕生し、『反省会雑誌』内の「欧米仏教通信会報」を独立させる形で国内向け雑誌『海外仏教事情』が創刊された。同誌は、明治二一年～明治二三年、ダーサやフォンデスらが寄稿者として登場した前期、明治二四年中頃までの、島地黙雷が会長となり、中西牛郎も関与した中期、廃刊までの後期、という三段階で変化するという。後期にかけて低調になり、明治二六年四月以降は海外宣教会の記事が『反省会雑誌』に発表される旨の広告が出され、事実上終焉を迎えた。衰退の理由として、吉永氏は、日本教団の仏教文化圏外への布教活動に対する未経験さと、結果として禅宗が布教に成功した点を踏まえ、真宗の宗教文化と欧米仏教者のニーズの不一致を指摘している。しかしながら、ロンドンとパリで最初の仏教伝道を行った海外宣教会の功績を評価し、中西牛郎のような仏教改革論者が、海外仏教からどのような思想的影響を受けたのか、という課題を提起している。

近藤論文は、先行研究の少ない仏教結社「令知会」の機関誌である『令知会雑誌』の創刊事情と、令知会に関する基礎的な情報を提示している。僧俗を問わない通仏教的立場から、学術と布教を軸にした有志の会として出発した令知会は、真宗本願寺派と真宗大谷派による共同での雑誌刊行を実現した。『令知会雑誌』は、明治一七年という早い段階に登場し、『伝道会雑誌』『海外仏教事情』『國教』の判型に影響を与えたとされ、創刊以来休刊のなかった実績により評価を高めた。令知会の組織的特徴は、東京に拠点を置き、知識人を対象とした種々の学術事業を行う組織として成立した点にあった。のちに『令知会雑誌』は、勝友会、求友会などの結社とそれらの会員を結びつける場へと変化したが、明治三二年に令知会より真宗大谷派の関係者が脱退したことで真宗本願寺派の組織としての性格が強くなっていく。近藤氏は、平松理英が

創刊一年後の同誌で扱った、①新島襄の同志社大学設立：仏教界の教育立ち遅れ、②南条文雄の帰国：仏教界からの洋行留学の少なさ、③教導職の廃止：目覚ましい運動のなさ、④宗教間の軋轢：社会への宗教の必要性再認識、⑤墓地及埋葬取締規則の発令：葬祭業者の特権喪失、⑥仏教西漸の傾向：英文仏教書の必要性、という六点のトピックから、「文明社会に適合的な宗教へと仏教を改革していく」という令知会の課題を挙げた。そして、会員数の減少から、この課題は一八八〇年代にひとつの区切りを迎えていたと推察している。

中西論文は、明治二三年七月の第一回帝国議会の衆議院選挙による政治的対立に、仏教・キリスト教の勢力争いがからんで、熊本を中心に九州地方で広く通仏教的結束が高揚した点とその挫折理由を雑誌『國教』を中心に検討している。熊本県で発行された『國教』は、編集・経営面の責任者で浄土真宗本願寺派僧侶の八淵蟠龍と、主筆として社説を担当した中西牛郎を主体としていた。「國教発行之旨趣」は中西によって、キリスト教者・自由民権論者に対抗するため、仏教者・国家主義の立場を意識して書かれていた。『國教』は、熊本という一地方の雑誌であるものの、当時の仏教界全体に大きな影響を与え、全国的にも知られた雑誌であった。出版条例上問題とされ、第九～一四号まで『第二國教』として発行、通号一六号から再び『國教』となる。雑誌の前半期はキリスト教批判が目立ち、二五号くらいからシカゴ万国宗教大会と夏期講習などの具体的事業に関する記事が多くなり、八淵の万国宗教会議への派遣資金募集が、國教雑誌社の最大かつ最後の関連事業となった。当時の九州仏教勢力の結束を示すものとして、『國教』以外にも『九州仏教軍』『真仏教軍』『仏教青年軍』が相次いで刊行された。しかし日清戦争を要因として、自由民権論者・キリスト教への対立意識が薄れると、『國教』の廃刊に例示されるように、通仏教的結束は終息に向かっていった、と中西氏は指摘している。

以上各論文の要約を行った。全体を通じて、共通する課題を三点挙げれば、大教校から大学林への改革など本山の動向と結社の関係、異なる地域の雑誌で大きな影響を与えていた中西牛郎の存在、日清戦争期には収束に向かっていくキリスト教との対立、が挙げられる。複数の雑誌の分析から見出された共通の課題は、当時の状況をより鮮明に反映していると考えられる。このように本書は、教団史・人物史とは異なる視座を提供しており、思想への影響を雑誌から辿るといった新たな可能性も提示している。本書に刺戟を受け、各宗門大学でも同様の視座からの研究が登場すれば、近代仏教研究がより進展するだろう。

他方、本書の約三分の二を占める第二部の各誌総目次は、僅かに欠号も含まれるものの、広告等の一部の省略を除いて、雑報覧なども可能な限り詳細に記載されている。近代浄土真宗を対象とする研究者だけでなく、主に仏教雑誌を用いて近代仏教儀礼を検証している紹介者にとっても、資料蒐集の労力を大幅に削減し、大変有益なものである。すでに『海外仏教事情』『國教』『令知会雑誌』の復刻版が出版されており、それらと併用することでさらなる効果が見込める。

なお、平成三一年（二〇一九）二月に本シリーズの第二巻『仏教婦人雑誌の創刊』が刊行された。さらなる続刊を俟ちたい。

（法藏館、二〇一八年二月刊、A5判、三八〇頁、六〇〇〇円＋税）

（駒澤大学大学院博士後期課程　たけい　けんご）

中西直樹編著

『明治前期の大谷派教団』

名畑直日児

本書は、「第一部　明治期大谷派の宗政史概説」、「第二部　石川舜台とアジア布教」、「第三部　教団改革運動への胎動」からなり、近代の大谷派教団の歴史研究であまり注目されてこなかった史料を翻刻し、その解説を付したものである。

近代日本仏教史を研究する中西直樹・龍谷大学教授は、これまで海外布教史、社会事業史、女子教育等に関わる史料の翻刻を手がけ、またその解説を通して、近代における日本仏教史を検証する研究をしてきた。史料を基本に据えた研究活動の過程で入手したと思われる史料の中で、これまであまり注目されてこなかったものを、研究史を概観しながら、その史料の位置づけを確認し、その意義を明らかにしている。

近代の真宗大谷派教団は、恒常的に財政難を抱え、また教団内部の対立に直面しながら、苦難の歩みを続けてきた。そして御影堂・阿弥陀堂（両堂）の再建を成し遂げ、その後、清沢満之らが教団改革運動を展開し、教団近代化の局面を迎えた。このように、これまでは清沢を中心とする歴史が注目されるばかりで、「それ以前の歴史についてはあまり語られることがない」（「はじめに」）という。本書のタイトルにある「明治前期」とは、そのような課題を踏まえたものである。

第一部では、大谷派宗史編輯所の編集員だった水谷寿が、大谷派宗務所発行の『真宗』に全十八回にわたって連載した「明治維新以後に於ける大谷派宗政の変遷」（一九三二年十月～一九三四年四月）を掲載している。

本書の解説では、宗史編輯所ができるまでの過程を概観しながら、真宗大谷派において宗史研究への関心が高かったとしている。一九二一年に侍董寮が設置されると、聖典編纂、

史料蒐集の二事業を掲げ、それが後に分離して、宗史編輯所ができた。そして侍董寮出勤の学師であった水谷は、同じく学師であった横田満とともに、『大谷派近代年表』（大谷派本願寺編纂課、一九二四年）を刊行している。そのような歴史の中で、水谷が上記の論稿を掲載していることになる。

この論稿は、戦前に連載されたものであり、同じような性質をもち、戦後に出版された柏原祐泉『近代大谷派の教団――明治以降宗政史――』（法藏館、一九八六年）と見比べると、その違いが見えてくる。両者ともに、宗務行政組織等の変遷を、「御達」、規則、職制等や、人事を掲載しながら、概観している。『近代大谷派の教団』では、当時の時代思潮にも触れ、「宗制寺法」、「地方宗務機関」、「寺院統轄の形態」等の項目を別に立てて、その変遷と課題を描いている点が水谷と違う。また清沢等の宗門改革運動（一八九六年～一八九七年）については、両者ともに触れられているが、『近代大谷派の教団』では、清沢の精神を柱とする、戦後の同朋会運動とその課題を背景としていることはいうまでもないだろう（同書でも、水谷の論稿も参照されている）。

一方、水谷の論稿では、幕末維新の兵火で焼失した両堂の再建、明治新政府との関係構築の中にあって、大谷派本願寺内部の対立や財政難に直面した点が特に強調されている。寺務所開設までの過程での対立で生じた闡彰院空覚の死（「偉大なる犠牲」）や大教院分離をめぐる大谷派内の対立を立項している。そして「篠原順明時代」、「渥美契縁時代」、「石川舜台時代」等と項目を立て、寺務所長によって時代区分をし、主にこの三人を中心とする勢力争いがあったと指摘している。

また「吾人は宗政の変遷を叙せんと欲して、ここに三度、財政史上の事に触れねばならぬ」（一三四頁）とあるように、つねにこの財政問題が、この時期の大谷派教団の大きな問題であったことがわかる。これは清沢関係史料、あるいは筆者が関わった『関根仁応日誌』（真宗大谷派教学研究所編、二〇〇六年～二〇一六年）でも同様の課題が見えてくる。諸史料を渉猟し、さらに阿部恵水、一柳知成、関根仁応等の「多数者の助言」をもとに論稿を書き進めてきた水谷の中では、この財政問題や人間関係の対立を見聞きする中で苦悩し、また宗務所から発行される『真宗』誌での連載ということで、叙述できなかったものも多くあったと思われる。筆者が特に気になったのは、一九〇四年一月の現如上人から彰如上人への寺務全般の委任事件であるが、簡潔な文章の最後には、「（阿部恵水談）（此辺の裏面史省略）」とあるのは、紙面の問題だけではないものがあるように思われる。

本書の「あとがき」には、この水谷の論稿が本書発行のき

っかけとなったことが記されている。史料の分量も全体の四分の三を占めている。第二部以降は、分量としては少ないが、石川舜台関係史料、そして一八九〇年～一八九一年の大谷派本願寺における改革運動関係史料の翻刻と著者による解説となる。

第二部は、近代の大谷派教団において、寺務総長をつとめ、海外布教を進め、清沢満之を中心とする真宗大学運営に多大な影響を与えた石川舜台による回顧録（『中外日報』掲載）である。史料の前半は、大谷光瑩（現如）が石川等とともに、一八七二（明治五）年に洋行したときの「思出」であり、また後半は、「明治仏教史」として、主に「見真大師号下賜」についての追懐録となっている。特に見真大師について、筆者の所属する教学研究所では『「見真額」に関する学習資料集「大師号」と「勅額」』（真宗大谷派宗務所、二〇一五年、第二版、非売品）を発行し、各地で学習会も開いている。両堂再建を抱え、明治新政府との関係構築、神道国教化政策等の中で、見真大師号の下賜がどのような意義を持つのかが課題となっている。その動きに大きく関わった石川の史料となる。

また第三部は、清沢を中心とする宗門改革運動（一八九六年～一八九七年）よりも以前に起きた改革運動関係史料である。一八九〇年に美濃・尾張・三河の信徒有志者が発表した「大谷派本願寺事務改革趣意書」（『愛国新報』掲載）、そして「真宗大谷派の改革党の旨趣」（明治二十四年二月二十日付『明教新誌』）、『欧米之仏教』第五編〈抄録〉・第六編〈抄録〉、「大谷派本願寺改革党の運動」（明治二十四年十一月二日付『明教新誌』）の五点である。

最初に触れたように、清沢の改革運動が中心に語られる中にあって、それ以前に大谷派教団の改革を訴える運動が展開していたことを知ることができる史料となる。自由民権運動の時代にあって、本山当局者の腐敗を糾弾し、議会開設を訴える動きは、時代の要請でもあり、清沢が関わった運動もそのような時代思潮の中にあったことは注目すべきであろう。またこの運動の中心的存在であった竜華空音については、その日記（『竜華空音日記』）も含めた研究が成されており（川口淳「『竜華空音日記』の翻刻――明治真宗大谷派改革運動の記録――」）（『同朋佛教』第五十四号〈二〇一八年〉）、今後の研究が待たれる。

本書は、史料の翻刻とともに、著者による解説が重要である。龍谷大学で仏教史学を学び、在家から本願寺派僧侶となった著者は、多くの関係史料を参照しながら、特に同時期の本願寺派の動きと合わせて大谷派の動きを概観している。

第一部解説の「明治仏教史研究の高まり」においては、宗派を超えて明治仏教史研究が成されたことが指摘されている。また「両派の宗史編纂事業」、「借財償却問題」、「家臣団解体の過程」、「公選議会開設をめぐる動向」、「明治新政府との関係」において、いずれも本願寺派の動きと合わせて、両者の共通点と相違点が指摘されている。本願寺派との動きと合わせて見るとき、大谷派教団の特殊性や課題等が見えてくる。

著者は、本書刊行後に同様な課題のもと、『新仏教とは何であったか――近代仏教改革のゆくえ』（法藏館、二〇一八年一二月発行）を発行している。明治二〇年代～三〇年代に、「新仏教」を標榜する人物や結社が多く出現し、宗派をこえた、仏教界全体の改革を目指した主張や運動に注目し、その後、日清・日露戦争時から大正期以降に衰退していった過程を描きながら、その衰退の原因を課題としている。そして一八九八年の井上円了による『雑居準備僧弊改良論』に記された、「余が所謂宗教の改革とは（中略）決して各宗を破壊して新宗教を立てるとか、新宗教を開くとか云ふことではなく、各宗各派は今日の儘にして、唯僧侶の魂を入れ換えることであります」（一五三頁）を上げ、その後の仏教教団の動きを象徴する言葉として見ている。

今回紹介する著者の『明治前期の大谷派教団』においても、同様の課題が通底している。史料を渉猟する中で浮かび上がる、近代における仏教教団史と、著者における課題が、「新仏教とは何であったか」となって表現されていると思われる。

近年の近代仏教研究においては、「仏教の近代化」として、新仏教運動のみならず、民俗の再編や先祖観と先祖供養の編成といったさらに広い視点で研究されている。たとえば大谷派であれば本山の教団改革運動に関わる人物だけではなく、地方寺院による寺院活動への視点も重要になってくる。清沢や関根等も、それぞれの寺院での門信徒の関わりを持ちながら、宗務行政への関与を考えている。著者の上記の課題にどれだけ応えるかはわからないが、これらの視点を含めた考察も必要であろう。

このような視点も含め、史料を基本とする本書では、史料を読む人に様々な課題を提供するものであり、このことが本書の意義であることを改めて確認しておきたい。

（法藏館、二〇一八年六月刊、A5判、二四一頁、二八〇〇円＋税）

（真宗大谷派教学研究所研究員　なばた　なおひこ）